

ラテン語で読むケンペル「鎖国論」
——『廻国奇観』所収論文とその翻訳について——

五之治 昌比呂

I はじめに

いわゆる「鎖国論」とは、エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kämpfer, 1651-1716）が日本の対外関係について著した論文であり、その論文は彼のラテン語による著書『廻国奇観』（1712）に収められている。本稿はそのラテン語論文とそこから作られた諸翻訳とを比較検討することで、今後の「鎖国論」研究の一助となることを意図したものである。従来の翻訳にはラテン語原典の意味をあまり正確に伝えていない箇所がいくつかある。そうした箇所を取り上げ、できる限りケンペルの原意を明らかにしたい。ケンペルや「鎖国論」については後で説明するが、まずはなぜそれらの翻訳が問題になるのかを示すために、次の二つの邦訳を例として挙げることにする。

[A] 且は果財奇貨により^(マツ) 且は使僧を遣はして説法する所の耶蘇経の教により且は新化の者と婚を通するにありて暫時の間に大なる富を致し深く国人の心を得て大いにおのが利益とし（志筑忠雄訳⁽¹⁾ p.54）

[B] かれらはやがてかれらの新しい物資を利用し、新しい宗教を手立てにし、また新しい渡りをつけて、一部の国民の人心を収攬したが、
（今井正訳⁽²⁾ pp.1149-1150）

訳の対象となっているのは「鎖国論」第四章のまったく同一の箇所、かつてポルトガル人が日本人に熱心に取り入ったということを述べているところである。一見して、同一箇所の訳文にしては違いが大きすぎると感じるのではないだろうか。なぜこのような違いが生まれたのか。その理由を知るためには、ケンペルの著作がたどった複雑な出版過程を説明する必要がある。

まずケンペルという人物についてであるが、彼についてはすでに多くの研究があるので、詳細はそれら先行研究を参照していただくことにして⁽³⁾、ここで

は簡単に紹介するにとどめる。

ケンペルは1651年9月、ドイツ北部のレムゴーという町に生まれた。紆余曲折を経てオランダ東インド会社に雇われることになり、1690年9月に出島商館医として来日した。1692年8月に日本を離れるまでの間、彼は日本に関する様々な情報、資料を集めることに意を注いだ。1694年には故郷のレムゴーにもどり、この地で医者として働く傍ら、旅行中に収集した情報、資料を整理して著作を刊行することを計画し、1712年にラテン語による著書『廻国奇観』を出版した。また、ほぼ同時にドイツ語で *Heutiges Japan*（「今日の日本」）という作品も執筆していたが、その刊行が実現しないまま、1716年11月にこの世を去った。

つまりケンペルが生前に出版することのできた著作は『廻国奇観』一冊だけである。『廻国奇観』というタイトルは日本での通称であり、原題は *Amcenitatum exoticarum politico-physico-mediciarum fasciculi V: quibus continentur variae relationes, observationes & descriptiones rerum Persicarum & ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectae ab auctore Engelberto Kämpfero, D.*（政治学的・自然学的・医学的主题に関する異国の魅力ある事柄五巻：著者エンゲルベルト・ケンペル博士が東方世界の旅行において注意深く収集したペルシアとアジア極地に関する様々な報告、観察、描写を含む）という長いものである。タイトルのとおりペルシャやインドでの見聞に基づく論文も含まれているが、日本の製紙法や茶に関する論文など、日本に関するものが6編収められている。また、第5巻は丸々日本の植物の研究に当てられており、「日本植物誌」と呼ぶべきものになっている。

いわゆる「鎖国論」はこの書の第2巻（*Fasciculus II*）第14章（*Relatio XIV*）をなす論文で、原題は *Regnum Japoniae optima ratione, ab egressu civium, & exterarum gentium ingressu & communione, clausum*（最良の見識によって自国民の出国および外国人の入国、交易を禁じ、国を閉ざしている日本王国）という。「鎖国論」という名称は、阿蘭陀通詞であった志筑忠雄が1801年にこの論文を翻訳した際に付したタイトルであるが、日本ではこの名称がかなり普及しているので、本稿でこの論文に言及するときは「鎖国論」で統一したいと思う。

さて、先に述べたようにケンペルは存命中に「今日の日本」という著作の出版を意図していた。ケンペルの死後、その遺産の多くは甥が相続したが、その中には「今日の日本」の手稿が含まれていた。その後甥は金銭難に陥り、遺産のうちの日本に関するコレクション（手稿を含む）をイギリスのハンス・スロ

ーン卿 (Sir Hans Sloane, 1660-1753) に売り渡した。

スローン卿はこの「今日の日本」を公刊したいと考え、自分のスイス人秘書
ジョイヒツァー (Johann Caspar Scheuchzer, 1702-1729) に編集・翻訳を命じた。
この英語訳は1727年に *The History of Japan* (『日本誌』) のタイトルで刊行さ
れた。ジョイヒツァーは手稿の翻訳に加えて、『廻国奇観』所収の日本に関す
る論文6編をラテン語から英訳し、『日本誌』の末尾に付録として加えた。当
然ながらその中には「鎖国論」も含まれている。この英語版『日本誌』は大き
な反響を呼び、すぐにフランス語重訳とオランダ語重訳が作られた。そのフラン
ス語重訳の一部はさらにドイツ語に翻訳されたが、これはかなり不完全なも
のであった。

1773年にケンペルの最後の相続人であった姪の一人が亡くなり、その遺品の
中から新たな手稿が発見された。「今日の日本」には別の原稿が存在していた
のである⁽⁴⁾。『廻国奇観』を出版したレムゴーの書店主はこの手稿の刊行を企
画し、ドーム (Christian Wilhelm Dohm, 1751-1820) という若い学者にその編集
を依頼した。ドームは編集作業を行うとともに、ケンペルの古いドイツ語を読
みやすく書き換えた。こうして出版されたのが *Geschichte und Beschreibung von
Japan* (『日本誌』、上巻は1777年、下巻は1779年に出版) である。ドームは
ジョイヒツァーに倣って、『廻国奇観』所収の日本に関する論文を自らの手で
独訳し、これらを下巻の末尾に添えた。

ドームはレムゴー原稿とジョイヒツァーの英語版『日本誌』を並べて校訂作
業を行ったが、スローン・コレクション中の原稿 (以下「ロンドン原稿」と呼
ぶ。当時は大英博物館が所蔵) は見ることはなかった。序文においてドームは、
できる限りケンペルの言わんとすることを忠実に伝えようとしたと言っている
が、実際にはある程度の改編が行われているようである。それを確かめるため
にはドーム版とレムゴー原稿との比較が必要であるが、ドームが利用したこの
原稿は現在行方不明である。したがって、ケンペルの「原典」と言えるものは、
現在大英図書館が所蔵しているロンドン原稿のみということになる。ドームの
行った改編を調べるためには、ドーム版とロンドン原稿を比較するしか手段が
ないわけであるが、その二つにズレがあった場合、そのズレはレムゴー原稿に
すでに存在していた可能性もあるという保留が常につく。

現存するロンドン原稿だが、これは長らく注目されることはなく、ケンペル
の著作といえどもつばらジョイヒツァー版とドーム版の『日本誌』 (加えてそ
の翻訳) が読まれてきた。ロンドン原稿の内容が活字として読めるようになって

たのはごく最近のことである⁽⁵⁾。そして、この原稿はケンペル一人の手になるものではなく、ケンペル、その甥、身元不明の筆者2名という4名の手稿が混じったものであることも明らかにされた⁽⁶⁾。

「鎖国論」に関してはどうか。「鎖国論」についても、スローン・コレクションの中にケンペルによるラテン語の手稿が存在する。ただし、これらは『廻国奇観』のための草稿である⁽⁷⁾。したがって、『廻国奇観』所収のラテン語による論文こそが「鎖国論」の決定稿なのであり、これを原典とみなすべきであろう。しかし、『廻国奇観』はそれほど入手しやすい本ではなかったし、それとは対照的にショイヒツァー版とドーム版の『日本誌』はあまりにも普及してしまった。そのため、多くの人々は英語訳ないしはドイツ語訳の「鎖国論」でこと足れりとしてしまい、ラテン語原文にまでさかのぼろうとはしなかったようである。少なくとも日本ではそのような試みは見られない。ケンペルの「鎖国論」が話題になるとき、参照されるのはたいていドームのドイツ語訳とそこからの日本語訳である。

それでは冒頭に引いた訳文に戻ろう。[A]の志筑忠雄訳の底本はオランダ語版であり、元をたどればショイヒツァーの英訳にたどりつく⁽⁸⁾。[B]の今井正訳はドーム版から訳出している。以下にその英訳文と独訳文、ならびにラテン語原文を挙げる⁽⁹⁾。

[C] and within a short compass of time, with their foreign commodities, with the Doctrine of the Gospel preach'd by their Missionaries, and with mutual marriages between them and the new converts, they so enrich'd and ingratiated themselves into the favour of the nation, (ショイヒツァー訳 p.330)

[D] Sie wusten auch in kurzer Zeit durch ihre neuen Waaren, neue Religion und Verbindungen, einen Theil des Volks sich ganz ergeben zu machen,
(ドーム訳 p.411)

[E] sic partem gentis devinctam sibi brevi reddidit mercibus exoticis, religione & connubiis, (ラテン語原文 p.498)

[ポルトガル人は] 舶来の商品、宗教、婚姻によって、国民の一部を短時間のうちに自分たちとの密接な関係に引き込んだ。

[A]の「新化の者と婚を通するにありて」と[B]の「新しい渡りをつけて」という箇所は顕著な違いであったが、こうして3つの文章を並べてみれば、そのような違いが生じた原因は一目瞭然である。ラテン語原文は *connubiis*（婚姻によって）であるから、この点だけをとれば明らかにショイヒツァー訳が正しい。ドーム訳はもちろん誤りではないが、*Verbindungen*（結びつき）という曖昧な訳語を当てたことにより、原典を参照しない限りそれが婚姻による結びつきであることは理解困難になってしまっている。[B]の誤りはドーム訳のせいである。

しかしながら、この一点をのぞけばドーム訳は概して原典に忠実であると言える。それに対し、ショイヒツァー訳は相当自由に原典にないものを補ったり変更を加えたりしている。読者の理解を助ける意図があったのかもしれないが、これは「恣意的すぎる」と言われてもおかしくないレベルであろう。この傾向はショイヒツァー訳全般に言えることであり、これを参照してはケンペルの原意を汲むことはできない。

くり返しになるが、手稿の複雑な問題が絡む『日本誌』とはちがひ、「鎖国論」には『廻国奇観』という底本が存在する。したがって、上の[C]と[D]のような違いは、純粹に訳者の翻訳の問題である。その翻訳がラテン語原文から逸脱しているなら、それはすべて訳者に責がある。ショイヒツァー訳はときに参考になることもあるが、原文からの逸脱が激しすぎる。「鎖国論」を読む際に翻訳を参照するなら、概して原文に忠実なドーム訳を参照すべきである。ただし、そのドーム訳も細かく見ていけば上述のような問題がある。考えられる理由としては、ケンペルのラテン語がそれほど読みやすいものではないことや、ドームの日本に関する知識が十分でないことなどが挙げられよう。しかし、問題のある訳文の中には、どうも意図的に原文から外れる訳をしたのではないかと思われる例もある。これから、ドームの訳に問題がある箇所を順に取り上げて、ラテン語原文とその筆者の解釈を示し、ドーム訳との比較をしていきたい。問題のある箇所は細かいものまで指摘すればたくさんあるが、紙幅の都合上、本稿では重要なものだけに絞ることにする。また必要があればショイヒツァー訳や志筑忠雄訳も引用する。

II ラテン語原文と翻訳文との比較

「鎖国論」においてケンペルは、まず鎖国のような政策を自然の理に反する

ものとして提示し、それから「にもかかわらずその政策には合理的な理由がある」とする論の進め方をしている。以下の〔1〕はその前者に属する箇所である。同一の性質を持ち、地球という一つの天体の中に住まわされている人類が分断されるというのは理不尽なことではないか、と主張している。

〔1〕第一章 (p.478)

Conditos Orbes esse velut urbes, quorum impenetrabili intervallo dissociata sejungantur diversi elementi, naturae & perfectionis viventia. E contrario, quae à summo Opifice simili donata sunt substantiâ & naturâ, ea quoque ejusdem Orbis finibus, velut unius urbis pomoerio, inclusa esse, ut aeterno foedere sociata vivant, sine nefando scelere non dividenda.

完結した天体というのは諸都市のようなもので、その間にある到達しがたい間隔のために、要素、性質、完成度を異にする生き物たちが、互いに分離され関係を絶たれた状態で生きている。これに対して、至高の創造主から同じ物質と性質を贈られた生き物は、永遠の絆に結ばれて生きるべく、ちょうど一都市の域内に閉じこめられるかのように、同一の天体の領域内に閉じこめられているのであり、甚だしい罪をもってしない限りこれらの生き物が引き離されることはないのである。

ドーム訳 (pp.394-395)

Die großen Weltkörper seien gleichsam Städte, deren lebende Wesen durch einen undurchdringlichen Zwischenraum von ganz verschiedenen Elementen getrennt sind. Dagegen wären die, welchen der höchste Baumeister nur ein Wesen und eine Substanz gegeben, auch in die Grenzen einer Welt, wie in die Ringmauern einer Stadt eingeschlossen, bestimmt in einem ewigen Bunde vereinigt zu leben, den man ohne schändliches Verbrechen nicht zerreißen könne.

その巨大な世界体はいわば都市であり、そこに存在する生き物たちは、到達しがたい間隔のために、諸要素を全く異にして切り離されている。それに反して、至高の創造主が単一の性質と単一の物質を与えた生き物は、都市の城壁の中に閉じこめられているがごとく、一つの世界の領域の中で、永遠の結末でひとまとまりになって生きていくよう定められている。そして、その結末は恥ずべき犯罪をもってしないかぎり引き裂くことはできないであろう。

ラテン語原文の *diversi elementi, naturae & perfectionis viventia* (要素, 性質, 完成度を異にする生き物たち) に対するドームの訳文において, *von ganz verschiedenen Elementen* は曖昧な訳である. *von* は「～の性質を備えた」の意味のつもりであろうが, これでは *Zwischenraum* や *getrennt sind* (= *getrennt sind*) にかけて読まれる可能性がある. 実際, 今井訳は「いろいろな要素から切り離されている」(p.1124), 小堀訳は「異質の元素から成る測り難い宇宙空間」(p.62) となっている. また, 原文の *naturae & perfectionis* (性質と完成度) が等閑視されているのも問題である.

[2] 第一章 (p.479)

quid est inquam aliud, quam sacram Divini ordinis & naturae legem violare?

それは, 神の秩序と自然の神聖な法を犯すことにほかならないのではないか.

ドーム訳 (p.395)

wenn, sagt man, die Japaner so handeln, verletzen sie denn nicht auf eine strafbare Art das heilige Gesez der göttlichen Ordnung und der Natur?

日本人がそのようにふるまうかぎり, 彼らは神の秩序と自然の神聖な法を犯しているものであり, 罰を受けてしかるべきなのではないか.

[1] と同じく日本の政策が自然の理に反していると主張している部分である. 引用箇所在先立つ部分では, 外国との交渉を絶っていることなど, 日本の極端な政策の例が列挙されている. 原文の「それ」とはそうした政策を指している. ドームは忠実に訳しているように見えるが, *auf eine strafbare Art* (罰を受けるべきやり方で) という一句を挿入しており, ネガティブなニュアンスをさらに強めている. ちなみにショイヒツァーはそのような挿入はしていない.

[3] 第一章 (p.480)

Japonum, inquam, qui intra microcosmi sui pmoeria felicissimo fruuntur pacis ac continentiae sudo, finitimarum regionum, quin totius mundi atque omnium nationum aequo animo carentes consortio.

日本人の, と私は言う. 日本人はその小世界の領域内できわめて幸福に晴朗な平和と節制を享受しているのであり, 近隣地域, いや, 全世界, 全民族との交際がなくても平気なのである.

ドーム訳 (p.396)

Ich sage nach dem Beispiel der Japaner, die ganz in ihre kleine Welt eingeschlossen, der allerheitersten Mäßigung und Seligkeit genießen, die ganz ruhig die Gemeinschaft mit den benachbarten Nationen, ja mit der ganzen übrigen Erde entbehren.

日本人の範例に従って、と私は言う。日本人はその小さな世界に完全に閉じこもり、きわめて晴朗な節制と至福を享受し、近隣諸国民との、いや自国以外の全世界との交際を絶って、全く平然としているのである。

第一章の終わり近く、日本のとっている政策もそう非合理的なことではないとする結論部分の一部である。原文では単に *intra microcosmi sui pmoeria* (その小世界の領域内で) と言っているところが、*ganz in ihre kleine Welt eingeschlossen* (その小さな世界に完全に閉じこもり) と訳されている。明らかに、原文にはないネガティブなニュアンスをことさらに加えているように見える。「完全に閉じこもり」は言うまでもないが、*ihre kleine Welt* というところも *Mikrokosmos* と訳して不都合はなかったのではないか。ドームの意図的な改編が読み取れる箇所であろう。参考までにショイヒツァーはこの箇所を *the Japanese, who confined within the limits of their Empire* と訳している。

[4] 第二章 (p.481)

Japonia indigenis 本日 *Nipòn, id est, Solis fulcrum, dicta, ea est Insula.*

Japonia, 本国人は「日本」(すなわち「太陽の土台」)と言っているが、これは島である。

ドーム訳 (p.397)

Japan, bei den Eingebornen Nipon, d. i. in der Sonnen Feste, heist diejenige Insel

Japan, 本国人によって *Nipon* (すなわち *in der Sonnen Feste*) と呼ばれているが、これは島である。

第二章は、日本の地理、自然環境、日本人の気質などを紹介している章であるが、その冒頭ではまず「日本」という国名についての説明がある。ケンペルの原文には「本日」と漢字が印刷されている。ケンペルはその程度の漢字は理解

していたはずであるが、ショイヒツァーやドームにとっては意味の分からぬ記号に過ぎなかったであろう。

ここで問題にしたいのは *Solis fulcrum* という部分である。fulcrum は頭や背中を支える寝台の板のことであるが、日本人ならばケンペルが「支え、土台」の意味でこの語を用いているのだらうと容易に見当がつく。二人の訳者はどう処理したか。ショイヒツァーは *the support, or foundation of the Sun* と正しく翻訳している (p.305)。一方ドームの訳語 *in der Sonnen Feste* はなんとも不可解なものである。この箇所だけを見ても、ドームがどのような意味で訳しているのか理解できない。今井訳や小堀訳は日本語としての「日本」の意味から考えて訳語を当てているので、ドームのドイツ語をどう解釈したかは示されていない。

この謎を解く鍵は「今日の日本」手稿と『日本誌』の方にある。こちらの著作でもケンペルは「日本」という国名の意味を説明している。まずは最もケンペルの意図に近いと考えられるロンドン原稿、すなわち「今日の日本」の手稿を見てみる必要がある。そこでは次のように書かれている。

「今日の日本」校訂本 p.48

ist nach den buchstaben so viel, als der Sonnen Fäste, gesagt; weil ni das feüer, und nach edeler bedeutung die Sonne, pon aber eine Grundfäste bedeütet.

〔日本とは〕文字から判断すると *der Sonnen Fäste* ということである。「日」の方が「火」を意味するが、より高尚な意味では「太陽」を意味し、「本」の方は「土台」を意味するのである。

ドーム版『日本誌』（p.73）は細部が異なるだけで、ほとんどこの文章と同じである。特に問題となる *der Sonnen Fäste, die Sonne, eine Grundfäste* は、綴りが変わっているだけで語はそのままである。

Fäste (=Feste) という名詞であるが、いくつかの辞書を見てみたところ、この語には複数の意味があり、最も一般的な意味は「砦」である。他には詩的な用法で「天空、蒼穹」の意味がある。また、鉱山の用語として「大きな岩層」さらに「坑柱、支柱」の意味もあるらしい。しかし、文章の最後の部分を読むかぎり、*der Sonnen Fäste* は、このひとまとまりで「太陽の土台」という意味であると解釈してよいのではないだろうか。それは日本語の「日本」とも適合するのであるから。

これは「本」が「土台」を意味するというケンペルの説明があるから可能な

解釈である。「鎖国論」の方にはそのような説明はない、それなのにドーム訳「鎖国論」では *in der Sonnen Feste* という訳語しか読者には与えられていないのである。「今日の日本」手稿のケンペルのドイツ語に忠実であろうとしたのかもしれないが、これでは読者に対して不親切であろう。ドーム自身はラテン語の *fulcrum* が「土台」の意味で使われていることを理解しているはずだから（ショイヒツァーさえ理解しているのだから）、何らかの補足説明を付けるべきである。また、*'in'* という前置詞を付けているのも不可解である。これでは「日本＝太陽の土台」なのではなくて、日本という国が太陽という土台の上に乗っかっているようなイメージを喚起するのではないだろうか。

このように訳した理由としてひとつ思い当たるものがある。「鎖国論」には引用箇所〔4〕の少し後に、ある日本人の述べたこととして次のような記述がある。

Nos Divûm genus Nifon sin, id est, Japones, seu κατ' ὄνομα sub solaris mundi homines: (p.483)

我々は神の一族、日本人、言葉の意味からすれば、太陽の下の国の人間である。

ドームは「日本人」の意味のところを *Menschen auf der Welt unter der Sonne* (p.399) と忠実に訳している。ケンペルはここで先ほどの「日本」の説明とは異なる記述をしていることになるが、とにかくそのように記している。

さて、ドームの訳語 *in der Sonnen Feste* にもどるが、上に引いた『日本誌』の記述を参照しなければ、*in der Sonnen Feste* は「太陽の輝く蒼穹のもとで」のような意味にもとれるわけで、ドームは上記の「太陽の下の国」との整合性をつけるためにあえてそのような訳をしたのかもしれない。しかし、それはケンペルの意図とは明らかに異なるのだから（ケンペルはラテン語で「支え、土台」と書いている）、本来ならば *der Sonnen Feste* には補足説明を付けるべきである。そうしていないうえ、元々ない前置詞を付け加えたりしていることを考えると、「日本＝太陽の土台」というイメージをドームが嫌ったのではないかと疑いたくなる場所である。

〔5〕第二章 (p.482)

Stoico prorsus animo violentas manus propriis visceribus injicere.

ストア派的な精神を持って、乱暴な手を自らの内臓に突っ込む。

ドーム訳 (p.398)

Mit edler Verachtung des Lebens und stoischem Muthe scheuen sie sich nicht, an sich selbst Hand zu legen,

彼らは生命を軽視し、ストア派的な勇気をもって、自分自身に危害を加えることをためらわない。

ショイヒツァー訳 (p.307)

they do not scruple, with an undaunted stoicism, to lay violent hands upon themselves: (The author's Latin expression signifies laying violent hands upon their bowels, because they generally make away with themselves by ripping open their belly.)

日本人の勇猛果敢さを説明している箇所である。日本人は敵に屈服させられたり、復讐ができなかったりした場合、このような行動をとるという。これは明らかに切腹のことを言っているのであろうが、ケンペルがこのような表現を選んだのは不可解である。「今日の日本」手稿には、自分で腹を切る自殺について何ヶ所か言及があるので（「今日の日本」校訂本 p.455, 457, 458, 460）、これはある種の誇張であろうか。参考に英訳も挙げたが、ショイヒツァーはかつこ書きで注を付しており、その彼の解釈は概ね正しいと言える。ケンペルのラテン語だけを頼りに書いたとすれば評価に値する。しかし、ドームはその解釈に従わず、独自の訳をしている。Hand zu legen は文字通り訳せば「手を置く」だが、「危害を加える」という意味の慣用句でもある。したがって、決して誤訳ではないのだが、なんとも曖昧な訳になってしまっている。ドームは『日本誌』編集の際に切腹の記述には何度も出会っているはずなのだが、それでも「内臓に手を突っこむ」という行為はどうしても荒唐無稽なものに思えたのであろうか。

[6] 第二章 (p.486)

Longè enim à meo iudicio abest, ut Japones mollium Sinensium progeniem duxerim; nec dissenserit, qui primi relatoris non praeoccupatus auctoritate, interiores Regni in ipso Regno notitias perscrutabitur: Tartarica habet, sed cicurata, sed expolita

ingenia; Tartaricum habet, sed Serûm venis foecundatum sanguinem;

私の判断するところ、日本人が柔弱なシナ人の血統であるとみなすことはとうていできない。最初にそのように言った人々の權威に盲従することなく、自らこの国に来てこの国のより深い内部情報を求めようとした人なら、この意見に反対はしないだろう。日本人はタタールの才能を持っているが、それは馴致され洗練された才能である。タタールの血を引いているが、それはシナ人の血によって豊かになった血である。

ドーム訳 (p.401)

Daher bin ich auch gar nicht der Meinung, daß die Japaner von den weichlichen Sinesern abstammen, und sicher kan dieses niemand glauben, der, uneingenommen von der Auktorität des ersten Reisebeschreibers, im Lande selbst genauere Kenntnisse einzieht. Diese Nation hat ein tatarisches, aber gezähmtes und ausgebildetes Genie, ein tatarisches Blut, das aber mit sinesischem gemischt ist,

それゆえ私は、日本人が柔弱なシナ人の血統を引いているという意見にはまったく賛成できない。また、最初の旅行記作家の權威に盲従せず、自らその地でより正確な情報を収集した人は、決してこんなことは信じないだろう。この国民はタタールの才能、ただし馴致され教育された才能を持っている。それは、タタールの血、ただしシナ人の血の混じったタタールの血である。

第二章の結びの部分である。原文の「シナ人の血によって豊かになった」の *foecundatum* (豊かになった) という肯定的なニュアンスの言葉を、ドームは *gemischt* (混じった) というニュートラルな表現に変えていることが注目される。ちなみに、ショイヒツァー訳は終わりの部分に恣意的な補充を行い、*There is a mixture in their blood of the fire and impetuosity of the Tartars, and the ferocity and calmness of the Chinese.* としている。また、このショイヒツァー訳のオランダ語重訳を底本としている志筑忠雄訳では「其氣象に韃靼人の威烈猛悍と支那人の活談温和と相合せたる所あり」となっている。ここで志筑は議論をいつのまにか血統ではなく性質の問題にすり替えているようにも見える。翻訳を重ねることによりラテン語原文からの隔たりが大きくなってしまった顕著な例である。

[7] 第三章 (p.486)

Ceterum, frustra constituerit tam munita & invictissima natio hospitem aequè atque

hostem areere, nisi finibus suis & contenta possit & beatior vivere. Posse autem, à quo Imperii fores obseravit, ab optimâ rerum magistrâ sese edoctam ipsa fatetur, & credet, quisquis nostrum ceteras regni condiciones inspexerit.

さて、これほど防備を固めた打ち負かしがたい国家であっても、その領土に満足し、かつさらに幸福に生活することができないならば、敵のみならず友好的な来訪者をも閉め出すことに決めたとしても、それは無駄に終わるだろう。しかし、それが可能であることを、この国は、帝国の扉にかんぬきをかけて以来、物事の最良の教師である「経験」から学んだのだと自ら認めているし、我々西洋人も、この国のその他の状態を精査してみるならば、誰もがそれが可能であると信じる。

ドーム訳 (p.401)

Eine Nation, die auf die Art durch Lage und Charakter gegen äußere Anfälle bevestigt und unüberwindlich gemacht ist, würde es indes doch vergebens versuchen, ihre Gäste und Feinde gleich streng einzuschränken, wenn sie nicht innerhalb ihrer eignen Gränzen zufrieden und glücklicher (als durch die Gemeinschaft mit Fremden) leben könnte. Daß sie dieses könne, bekent die Nation selbst, seit sie die Thore ihres Landes verschlossen hat, und jeder von uns kan sich davon auch leicht überzeugen, wenn er nun noch die übrigen Vortheile dieses Landes erwägt.

ある国家が、そのように外部からの攻撃に対して、地理的位置と性格により、堅固で難攻不落の状態になっているとしても、国家が自国の国境に満足し、（他国と通交を結んだ場合よりも）幸福に暮らすことが出来ないとしたら、客人と敵とを同様に厳格に制限しようとしても、それはむだな試みに終わるであろう。このことが可能であると、国の扉を閉ざして以来、国民自身が告白しているし、我々西洋人も、今一度この国の他の利点を考慮するなら、誰もが容易にそう納得する。

シヨイヒツァー訳 (pp.312-313)

And yet, with these many and considerable advantages, I have hitherto enumerated, it would be still a vain attempt in the Japanese, even with all their strength and resolution, to keep their Country free from invasions from abroad, and to stay at home themselves without any communication with foreign nations, were it not, that within their own limits, they find enough where-withal to live content and happy.

Ever since the Empire hath been shut up, nature, that kind mistress, taught them, and they themselves readily own it, that they can wholly subsist upon what it affords, and that they have no need of being supplied by foreigners with the necessities of life. Any one who will take the pains to consider the Country in its present happy state and condition, will find it to be true what I here assert.

第三章の冒頭である。この章では鎖国政策を可能にしている日本の自然的条件と日本人の宗教、思想について論じている。ドーム訳は一文目から問題がある。ラテン語には冠詞がないため、原文の最初の文の主語 *natio* (国家) は、これだけでは日本国を意味しているのか一般的に国家を意味しているのかが分からない。しかし、その直前の *tam* (これほど) と言った表現や、第二文の主語が明らかに日本国でありそれが代名詞の *ipsa* となっていることを考えれば、第一文の主語は日本国のはずである。しかし、ドーム訳では主語が *eine Nation* (ある国家) になっており、文全体が一般論になってしまっている。ちなみに、ショイヒツァーは原文の主語を日本国ととっている。ドームの誤りは冠詞がないためだと考えることもできるが、「これほど防備を固めた打ち負かしがたい」という形容句を日本に対して使うのを嫌ったためと推察することもできる。

次に *ab optima rerum magistra* の部分の解釈に触れたい。これは *experientia est optima rerum magistra* (経験は物事の最良の教師) というラテン語の格言に基づくものであり⁽¹⁰⁾、要するにケンペルは「経験から」と言いたかったのである。ショイヒツァーは、*nature, that kind mistress, taught them* と、適当な訳をしてごまかしている。ドームもこの格言を知らなかったらしく、彼は無視して訳出していない。鎖国政策を擁護するにあたって、ケンペルは「経験が証明している」ということも論拠の一つとして考えているわけだが、ドーム訳からはそうした点は消えてしまっている。

参考としてここで述べておきたいが、志筑訳において「鎖国」という言葉は、本文としてはここで初めて現れる。「鎖国より以来」という訳文だが、志筑訳の大元であるショイヒツァー訳では *Ever since the Empire hath been shut up* となっている。ラテン語原文では *a quo Imperii fores obseravit* (帝国の扉にかんぬきをかけて以来) とかなり具象的なイメージで表現されている。ドーム訳もラテン語原文に近い表現になっている。煩雑になるので箇所を挙げることはしないが、ケンペルは「国を鎖す(閉ざす)」ということを表現するにあたって、たいてい *claudere, occludere* という動詞とその派生語を使っている。つまり「国の扉を

閉ざしている」というイメージを持っていたのである。

III おわりに

以上、主にドーム訳の問題のある箇所を見てきたわけだが、これらの中には単純なミスと言えるものと、原文からの意図的な逸脱と推察されるものがあった。後者にあたるのは〔2〕〔3〕〔4〕〔6〕〔7〕である。これらに共通しているのは、日本や日本人に関する記述にネガティブなニュアンスを付け加えようとする意図である。冒頭に挙げた例〔D〕においてドームはラテン語原文の *connubiis* を素直に「婚姻によって」と訳さず、*Verbindungen*（結びつき）という曖昧な語を用いて訳していたが、こうして他の例を見てくれば、そこにも同じ意図を読み取ることが可能ではないだろうか。

ドームは「鎖国論」の翻訳文を『日本誌』に収めるにあたって、異例とも言えることをしている。翻訳文と注釈の後ろに「編者の後記」（*Nacherinnerung des Herausgebers*）という長文の批評を付け加え、「鎖国論」のいくつかの箇所に対してドーム自身が反論を試みているのである。「鎖国論」は鎖国肯定論であり、鎖国が可能であった主たる理由としているのは、要するに「外国との交渉を持つ必要がないほど日本が豊かであり、日本人が優れているから」ということである。ケンペルのこの過度な日本賛美をドームは認めることができなかった。その理由のひとつとして「ドイツ啓蒙主義」ということが議論されている。ドームは啓蒙主義者の一人だったのである。その妥当性については、筆者の扱える範囲ではないので、そのような議論があることを紹介するにとどめる⁽¹¹⁾。

今回ドーム訳について批判的な論考を行ってきたが、それは問題のある箇所を取りあげて議論していたからで、ネガティブな部分がクローズアップされたにすぎない。ドーム訳は概して原文に忠実である。もっと徹底して原文に変更を加えることもできたであろうが、ドームはそのようなことはしていない。ただし、翻訳は翻訳である。原文のラテン語のニュアンスがドイツ語ではうまく伝わらない部分も少なくはない。「鎖国論」について本文の字句にまでこだわることのある議論をするときには、ドーム訳を過信せず、ラテン語原文にも当たってみた方がよいということである。

参考文献

ケンペルの著作・翻訳

・欧文

- Kämpfer, Engelbert, *Amœnitatum exoticarum politico-physico-mediciarum fasciculi V: quibus continentur variæ relationes, observationes & descriptiones rerum Persicarum & ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectæ ab auctore Engelberto Kämpfero, Lemgo, 1712* (復刻版: Teheran, 1976)
- , *The history of Japan*, translated by J.G. Scheuchzer, 3vols, London, 1690-1692 (復刻版: Richmond, 1993)
- , *Geschichte und Beschreibung von Japan*, aus den Originalhandschriften des Verfassers herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm, 2 vols, Lemgo, 1777-1779 (復刻版: Stuttgart, 1964)
- , *Kaempfer's Japan: Tokugawa culture observed*, edited, translated, and annotated by Beatrice M. Bodart-Bailey, Honolulu, 1999
- , *Werk*, 1/1; 1/2 *Heutiges Japan*, hrsg. von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel, München, 2001

・和文

- エンゲンベルト・ケンペル著, 志筑忠雄訳「鎖国論」, 『少年必読日本文庫 第五編』所収, 博文館, 1891 (志筑忠雄訳「鎖国論」, 1801 成, オランダ語版に基づく)
- エンゲルベルト・ケンペル著, 今井正編訳『[新版] 改訂・増補 日本誌ー日本の歴史と紀行ー』(7 分冊), 霞ヶ関出版, 2001 (ドーム版に基づく)
- ※ドーム版に基づく小堀桂一郎訳「鎖国論」は下記の小堀桂一郎(1974)に含まれている (pp.61-124) .

二次文献

- 大島明秀 (2009) 『「鎖国」という言説: ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史』, ミネルヴァ書房
- 岡野薫 (2007) 「18 世紀後期のドイツにおける啓蒙主義時代の日本観ーCh. W. ドームによる「鎖国論」批判とその同時代における評価」, 『東北ドイツ文学研究』50, 東北ドイツ文学会, pp.1-18

- 片桐一男（1995）『阿蘭陀通詞 今村源右衛門英生－外つ国の言葉をわがものとして』，丸善ライブラリー
- クライナー，ヨーゼフ編（1992）『ケンペルのみたトクガワ・ジャパン』，六興出版
- （1996）『ケンペルのみた日本』，日本放送出版協会
- 小堀桂一郎（1974）『鎖国の思想：ケンペルの世界史的使命』，中公新書
- 中直一（2001）「ケンペル『日本誌』と編者ドーム：「啓蒙」をめぐる議論を手がかりに」，『ドイツ啓蒙主義研究』[1]，大阪大学言語文化部，大阪大学大学院言語文化研究科，pp.27-41
- （2003）「ケンペル研究の現段階」，『阪大比較文学』1，大阪大学比較文学会，pp.45-65
- （2004）『ケンペルの比較文化論的研究』（平成14年度～平成15年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)一般(2)研究成果報告書）
- 原田裕司（1999）「『鎖国論』の訳者志筑忠雄のラテン語辞書」，『言語文化研究』25，大阪大学言語文化部，pp.119-142
- ボダルト＝ベイリー，B. M.（1994）『ケンペルと徳川綱吉：ドイツ人医師と將軍の交流』（中直一訳），中公新書
- （2009）『ケンペルー礼節の国に来たりてー』（中直一訳），ミネルヴァ書房
- ボダルト＝ベイリー，B. M.・マサレラ，D. 編（1999）『遥かなる目的地：ケンペルと徳川日本の出会い』（中直一，小林早百合訳），大阪大学出版会
- ボート，W. J.（2007）「『鎖国論』から見た18世紀の世における日本 日本における18世紀」，「志筑忠雄没後200年記念国際シンポジウム」実行委員会編『蘭学のフロンティアー志筑忠雄の世界』長崎文献社（2007）所収，pp.71-81
- 渡邊直樹（2008）「ケンペルとドームー東西比較に潜む時代の位相」，『外国文学』57，宇都宮大学外国文学研究会，pp.169-186
- （2009）「啓蒙主義者ドームとケンペルー儒教と宗教的寛容の接点」，『宇都宮大学国際学部研究論集』27，宇都宮大学国際学部，pp.39-54

注

- （1）この志筑忠雄訳「鎖国論」（1801年）については様々な先行研究で議論

されているため、本稿ではそれをくり返すことはしない。大島（2009）pp.49 以下が特に詳しく述べているのでそれを参照のこと。志筑忠雄の翻訳は元々写本で読まれていたが、筆者は写本は見えていない。参照したのは『少年必読日本文庫 第五編』の活字版であり、引用に際してもこれを用いた。ただし漢字は適宜新字体に改めた。

（2）今井訳『日本誌』にはいくつかの版があるが、筆者は7分冊の形になった最も新しい版を用いた。「鎖国論」はその第7分冊に収められている。ページ番号については第1分冊から通しでふられているので、引用にあたってはページ数のみを記すことにする。

（3）ケンペルの生涯についてはボダルト＝ベイリー（1994）、同（2009）を、彼の主著『日本誌』の書誌学的な問題については中（2004）を特に参照のこと。「鎖国論」に特化すれば、大島（2009）が「鎖国論」受容の包括的な研究となっており、主な論点はこの書に集約されていると言ってよい。また参考文献表も充実している。

（4）中直一氏にならって、この原稿を以下「レムゴー原稿」と呼ぶ。レムゴー原稿は現在行方不明である。編訳者のドームはそれは2種類の手稿からなると言っており、一方を「伯父の手稿」もう一方を「甥の手稿」と呼んでいる。ただし、この手稿の正体については様々な議論があり、この二つが単純にケンペル自身とその甥の手になるものであるとは言えない。この問題に関するこれまでの議論は中（2003）、同（2004）に集約されている。

（5）まずは英訳（Bodart-Bailey 訳 *Kaempfer's Japan*, 1999）が出版され、その後ドイツ語原文の校訂本（Michel 他編 *Werk*, 1/1; 1/2 *Heutiges Japan*, 2001）が公開された。

（6）詳しくは中（2003）、同（2004）を参照。レムゴー原稿のみならずこのロンドン原稿についても手稿の問題はかなり複雑であるが、中（2004）の論考にはその仮説の一つが示されている。また、ドーム版と「今日の日本」手稿との比較により、ドームがどのような改編を加えたかについても、いくつかの推測が紹介されている。

（7）大島（2009）pp.28-32 を参照。大島氏は pp.369-372 に『廻国奇観』所収の本文と草稿との異同を掲載してくれているが、翻刻があまり正確でないため、残念ながらここからの読解は困難である。

（8）「鎖国論」の中でケンペルはしばしばギリシア・ローマの故事を引いている。志筑は翻訳のあちこちに注を付けており、そうしたギリシア・ローマの

故事も注解の対象になっていることがある。これらは興味深いものであるが、本稿では余裕がないので扱わない。そうしたトピックを扱っている先行研究として原田（1999）は紹介しておくべきであろう。「鎖国論」の冒頭部分にはウェルギリウス『農耕詩』からの詩行の引用があるが、志筑の利用したオランダ語版にはそのラテン語原文しかなく、オランダ語訳は付されていない。志筑は自力でこれを漢詩に翻訳している。原田氏の論文は、その翻訳が可能であった事情と、翻訳の際に用いたラテン語辞書に関する詳細な論考である。

（9）ラテン語原文、ショイヒツァー訳、ドーム訳の引用は参考文献表に挙げた復刻版を底本とする。ショイヒツァー訳「鎖国論」は復刻版の第3巻、ドーム訳「鎖国論」は復刻版の第2巻所収である。ページ数を示す際には略号は p. で統一する。引用に際し古い活字体は現行のものに改めた。必要と判断した箇所には日本語訳を付したが、それらはすべて拙訳である。

（10）この格言は古典期のものではないようである。筆者は出典を探し出すことができなかった。比較的古いものでは、ペトルルカの書簡の中にこの表現を見つけた（ペトルルカ『親近書簡集』14.1.20）。

（11）ドームと啓蒙主義については、クライナー編（1992）所収の座談（特に pp.199-204. この座談はクライナー編（1996）にも再録されている）、中（2001）、岡野（2007）、渡邊（2008）、同（2009）を参照。